新橋小学校
学校だより
令和５年１月 13 日
令和４年度　第９号

なぜだろう　なぜかしら

校長　西尾琢郎

新年あけましておめでとうございます。冬らしい寒さが続いた年末年始、みなさまご健勝にお過ごしでしょうか。本年も新橋小の子どもたちを、どうぞよろしくお願いします。

さて今回は、子どもたちが首を傾げて不思議がる姿が目に浮かぶような「なぜだろう　なぜかしら」という言葉を、タイトルに掲げてみました。実はこれ、私がかつて籍を置いていた出版社が、昭和 30 年代から長いあいだ刊行を続けてきた小学生向けの科学読み物のタイトルであり、学習マンガのはしりとなった書籍の一つでもあります。私はこのタイトルが大好きで、ふとしたときにもつい頭の中で「なぜだろうなぜかしら」と唱えていることがあるほどです。

目や耳にした事物やできごとに対して「なぜ」という疑問を抱くのは、人間のもっとも自然な反応の一つだと思います。けれども私たちの日常を振り返ってみると、この「なぜ」という心の動きが、大変に鈍くなってきているのではないかと感じることがあります。どんなことを見聞きしても「そういうものだ」「仕方ない」と、無意識に受け入れてしまっていることはないでしょうか。

子ども時代は、この「なぜ」という心のはたらきが、もっとも活発にはたらく時期ではないかと思います。「なんで？」「どうして？」という子どもの問いかけや問い返しに対して、私たち大人はついつい「いいから黙ってやりなさい」とか「そう決まっているの！」などという「塩対応」をしてしまいがちです。ですがそうした対応の積み重ねが、いつしか子どもたちの「なぜ」を、文字通り塩漬けにしてしまっているのかもしれません。私たち自身の「なぜ」も、もしかするとそうして封じ込められてきてしまったかもしれない。私にはそう思えるのです。

学校では長い間、すでに「そう決まっている」答えを子どもたちに教える場として機能してきました。しかし今、社会には明確な答えのない問いがあふれ、しかしその問いに向き合うことでしか、明日を切り拓くことができない局面に至っています。そのとき改めて大切になってくるのが、「なぜ」という問いです。

先日新聞で、劇作家の鴻上尚史さんが「エンパシー」について語っていました。同情や同感を意味する「シンパシー」はよく知られていますが、「エンパシー」は共感と訳されることが多いようです。しかし鴻上さんは、「共感」では意味合いが狭くなるとして「その人の気持ちになってみる力」だと語っていました。たとえ同情も共感もできない相手であっても、その言動の理由を考えてみること。それが「エンパシー」だというのです。確かにこれを共感と訳してしまえば、エンパシーの届く範囲はとても狭いものになってしまうでしょう。

私はこれを読んで、国と国との諍いについて考えていました。それぞれの国にはそれぞれの考えや立場があり、事実と呼ばれるものでさえ、一つではないことが珍しくありません。そこでは容易に共感など見いだせるものではないのです。しかし、そこで思考を打ち切ってしまえば、後に残るのは力と力の対決のみです。容易には飲み込めない相手の言い分に、それでも「なぜ」と問いを立て、その理由について考え、また手立てを講じることは、起きていることの出口を見つけ、また、そうしたできごとの再発を防ぐ上で、やはり欠かせないことなのではないでしょうか。

私たちの中で「なぜ」を問う心の力が弱まっていくことは、そのまま、今起きているさまざまな不条理を容認してしまうことにつながる可能性があると思います。だからこそ私たちは、明日の大人となる子どもたちの「なぜ」を、できる限り大切に受け止めて、向き合っていきたいと思っています。

年の初めに、少しばかり大きな話になってしまいましたが、明日の世界平和はもとより、今日明日の学校生活を、そして授業を楽しいものにするためにも大切なのが「なぜ」という心の底からの問いなのです。どうか皆さんも、子どもたちの「なぜ」に、そして眠っていた皆さん自身の「なぜ」に、今までよりも少しだけ、真剣に向き合ってみませんか。

この新しい年が、皆さまにとって良い一年になりますよう、心よりお祈りしております。